

# フーコーにおける物質性

## ——その現代的意義——

神戸松蔭女子学院大学 西川純司

### 1 目的

近年、物質（モノ）に着目した研究が世界的にますます盛んになりつつある。こうした研究の中には、ミシェル・フーコーの議論に依拠しているものも少なくない。たとえば、ジュディス・バトラーやニコラス・ローズによる権力論は、人間的な生を条件づける都市の物質的側面（たとえば、インフラストラクチャー）に目を向けている（Butler 2015=2018; Rose 1999）。あるいは、カレン・バラッドやアネマリー・モルなど実在論的な立場からモノを重視する議論にとっても、フーコーは依然として重要な参照点——ときには乗り越えるべき対象——となっている（Barad 2003; Mol 1999）。

しかし、これらの研究では、フーコーの物質性に関する議論が十分に検討されているとは言い難い。そこで本報告では、フーコーの統治性研究において示された物質性の概念を再検討し、今日のモノに着目した研究へと架橋するための足がかりを得る。

### 2 方法

本報告では、フーコーが統治性について論じたテキストを中心に検討する。とりわけ、『安全・領土・人口』や「18世紀における健康政策」を分析の対象に据える。

### 3 結果

フーコーは、統治性の議論のなかで「人口」（population）を「物質性」（matérialité）との関係で捉えていることがわかった。18世紀半ば以降の西欧社会における権力のメカニズムが「生権力」（bio-pouvoir）として捉えられ、この権力の標的が人口とされていたことは、よく知られている。だが、人口は単に統計学的に把握されるデータなどではなく、自らが身を置く物質性（物質的な要素の総体）に結びつくかたちでのみ存在する個人の集合として考えられていた。ここでの物質性とは、たとえば、河川や沼地などの自然的な所与の総体として、また、住宅や都市といった人工的な所与の総体として理解されるようなものである。したがって、一連の議論のなかでフーコーが注目していたのは、人間（の集合）だけでなくそれと不可分に結びついた物質、さらに言えばそれらの相互的な関係であった。

### 4 結論

フーコーによるこうした物質性に関する議論は、現在活発に議論されているモノを重視する研究を先取りするような性格をもっている。こうした知見は、フーコーの議論を改めて今日的な視点から再検討する必要性を示唆している。

### 文献

Foucault, Michel, 1979, "La politique de la sante au 18e siecle," *Les machines a guerir. Aux origines de l'hôpital moderne*, Bruxelles, Pierre Mardaga, coll. « Architecture-Archives », 7-18. (=2001, 中島ひかる訳「18世紀における健康政策」小林康夫他編『ミシェル・フーコー思考集成 8 政治/友愛』筑摩書房, 6-22.)

——, 2004, *Sécurité, territoire, population: Cours au Collège de France (1977-1978)*, Paris: Gallimard & Seuil. (=2007, 高桑和巳訳『安全・領土・人口』筑摩書房.)